

# 『小松左京自伝』第二部の聞き手として〜私の小松左京観〜

小樽商科大学ビジネス創造センター教授 澤田芳郎

## 1. はじめに

私が小松左京先生の読者、そしてファンになったのは高校三年生だった一九七二年五月のことである。最初に接したのは、前年に角川文庫から再刊された『日本アパッチ族』だった。一九七八年には小松左京研究会に入り、就職して上京した一九八二年から八三年にかけて映画『さよならジュピター』のパソコンCG制作に参加した後、一九九〇年代後半から警咳に接する機会が増え、二〇〇一年には『小松左京マガジン』の連載インタビュ―「小松左京 自作を語る」の聞き手に起用していただいた。このところ、「自作を語る」を収容した『小松左京自伝〜実存を求めて〜』（二〇〇八、日本経済新聞出版社）が各方面の小松左京論で引用される傾向になっていくことから、その成立経緯をご紹介

介し、またそれを通して形成された私自身の小松左京観を述べさせていたただきたいと思う。

## 2. メイキング・オブ・「自作を語る」

小松先生が『小松左京マガジン』に自作の回顧を連載される意向だが、その聞き手になる考えはあるかと、株式会社イオ（小松左京事務所）の乙部順子マネージャーから問われたのは、マガジン第三巻刊行直後の二〇〇一年八月だった。願ってもないことで、喜んでお受けした。当時は愛知教育大学で科学社会学や情報システム論を担当する教員だったが、十月から「教員ポストで雇用された産学連携コーナーディネーター」というポジションで京都大学に移ることになっていった。すでに兼任期間が始まっており、このときも

京大の正門付近にあった公衆電話で乙部さんと話したことを覚えている。本当は小松左京ファンではあっても文学や哲学の知識をさして持たない私に対応可能かという問題もあった。が、とりあえず第一回を実施することにした。一方で小松左京研究会の武田直樹会長に相談し、小松研<sup>コマケン</sup>で有志を募って進めることを小松先生と乙部さんにご提案して、了承を得た。

さてしかし、このインタビュは難しいことになるのではないかとあらためて思った。『小松左京マガジン』の読者には小松先生が話される様子を直接ご存じの方も多いと思うが、とにかく質問にまともに答えていただけるとはなかなかない。一つの問いに対して関連するさまざまな事項とその背景への言及が始まり、多分に横道にもそれつつ連想が連想を呼んでどこまで行くかわからないのだが、にもかかわらずある時点でふつと答えが出ることもある。つまり「助走」しながら、オリジナルな回答を考えておられるのである。すると聞き手も何らかの観点で小松先生の発言を予想し、次の質問を考え、タイミングを見計らいながら待ちかまえていなければならない。——ということが、私に十分出来たわけではない。

ところがここで役に立ったのが録音の書き起こしだった。謝金として一回につき五万円いただいたので、その半分を東京に赴く旅費に用い、あとは書き起こし発注に回したが、届いたものを編集しているとインタビュの際には気づかなかった対話構造が発見できるのである。それを手がかり

に不要部分を削除し、論理をもとに発言順序を入れ換えるなどして流れを与えると、記事の骨格が出来てきた。ごくわずかながら、回答に合わせてそれを問う質問を設けた箇所もある。またさらにわずかながら、以前聞いたコメントを記憶に基づいて再現、投入した。ここまで来ると多少なりとも突っ込んだ質問を思いつくことがあり、それは早めに進行させた次回記事のためのインタビュの際に実施、加筆した。書き起こしは最終的に十分の一度に圧縮されたが、このようにして成立した記事が掲載できるのは、当然ながら小松先生が目を通されるからである。

しかし二〇〇一年十月二日にインタビュし、二〇〇二年一月発行の第五巻に掲載された第一回の『日本沈没』では、このやり方はつかめていなかった。なるべく質疑の形を崩さず、小松先生の発言を極力維持しようとした結果、今からすれば貧弱な記事になっている。それをクリアできたのは第二回で『果しなき流れの果に』、第三回で「地には平和を」をそれぞれ担当された小松左京研究会の新聞策雄氏、武藤俊一氏の記事を拝見してからであった。ここまですべて再構成してもOKが出るのか。そして、再度私が担当した第四回の「宇宙小説」からは上記の方式が軌道に乗った。ただし、この時から小松左京研究会の何人かの会員に同席をお願いした。私が思いもつかない質問をもらって大いに弾んだインタビュの構成は、間名啓之氏が質問も主導した第六回「見知らぬ明日／歴史小説」を除いて、基本的に私が担当した(第七回、第十回、第十一回は共同担当)。

小松先生もいつそう踏み込んだ発言をされるようになり、こうして「自作を語る」は、休載二回をはさみつつ、「高橋和巳を語る」を含めて二〇〇六年十月発行の第二十四巻まで五年間続いた。

小松先生は連載中から「自作を語る」を書籍にしたいと言われ、乙部さんも尽力されたが、実現しない状況が続いた。ここで『日本経済新聞』連載（二〇〇六年七月）の「私の履歴書」を第一部、「自作を語る」を第二部とする企画を着想し、社内決裁を得て実現させたのが日本経済新聞出版社の編集者、細谷憲司氏であった。増補改訂の作業は二〇〇七年六月から開始した。『日本沈没』などを中心にあらためて追加インタビューを行ない、マガジン版下の電子媒体に加筆し、章分けも含む再構成のうえ、最終的に小松先生のチェックと乙部さんによる若干の加筆修正を経て刊行されたのが二〇〇八年二月である。小松左京研究会で主要作品のあらすじも作成した。副題を含む書名は乙部さんが発案し、小松先生が承認されたと聞いている。

### 3. 私の小松左京観

#### 宇宙と人間

小松左京先生が長年にわたってテーマとされたのは「宇宙にとって人間とは何か」であった。二〇〇四年には「宇宙にとって文学とは何か」、二〇〇六年には「宇宙にとって生命とは何か、知性とは何か」として考察されていたが（『自伝』第二部第四章、第十四章）、最終的には生前最後

の著書（全集を除く）となった箴言集タイトルの「宇宙にとって人間とは何か」に統合される。私が「自作を語る」で接した小松先生は、要するにそれが確信できないことに苦しんでおられた。

小松先生の小説は自然科学系、理工系の疑問、着想がきっかけになることが多かった。実際、日本を沈没させる基的メカニズムを明らかにして『日本沈没』が、核酸だけのウィルスの成立根拠をつきとめて『復活の日』が出来ている。そしてそれは、『自伝』第二部の随所で語られているように、『虚無回廊』も同じだった。そのことを端的に示したのが次のコメントである。

小松 これはあまり言いたくないんだけど、科学が発達して宇宙が解明されたら人間の存在の意味もわかって、宇宙と人間は和解できると思ってたんだ。ところがいくら待ってもその徴候が出てこない。僕は本当はいても立つてもいられないんだ（『自伝』第二部第三章）。

実はこの言葉は一九九七年頃のある深夜、ホテルの一室で聞いたものである。当時は十分フォローできなかつたが、「自作を語る」を通してようやく何かつかみかけていた私は、その最終回で問うた。「宇宙にとって」という立論は宇宙が先に分かっていることが前提だろう。少なくとも同時に分かる必要がある。その問いも先生の言う「宇宙」の概念も、実証科学のそれではないのではないか。——すると先

生はそのことを認め、「実証科学の限界を最後に救うのは、やっぱり哲学的な立場、情念なんだね。そのときに科学と哲学がくつついてくるわけだ」（『自伝』第二部第十四章）と語り、また知性が発生することで宇宙史の変遷が違ってくる可能性を指摘された。後者に関しては、同じ章の前段に「人間の知性と科学技術が宇宙秩序を変えるかどうか。それもやっぱり宇宙の法則に従っているのかというのが大問題だったんだ」という発言もある。そして小松先生が問題解明の手がかりとして求めたのが、科学的宇宙論や科学的文明論が収斂するものとして、やはり同じ章で提起した「科学的神学」であった。そしてこうも語られた。

小松 宗教はキリスト教神学にギリシャ神学、ローマ神学。一神教はそれからペルシャ教、イスラム教があつて、多神教がヒンズー教、仏教、神道だ。そこに新興宗教も入ってくる。ここで比較宗教学、一般宗教学をやろうと思つたら、そのコアになるのは何もキリスト教の神学じゃないだろう。つまり神とか仏とかそういうのを全部、一種の止揚アウフヘーベンをすると、宇宙になるだろうと思うんだ（『自伝』第二部第十四章）。

ここには宗教を含む人間の知性に宇宙の構造が反映されているというフィロソフィーがある。しかし、「宇宙にとって人間とは何か」は容易に答えの得られる問いではなかつただろう。自然科学には期待できず、宗教を通じた宇宙

像も見えてこない。だから『虚無回廊』が完成しなかつたのだ——と、私としては考えざるをえない。物語そのものとして解がほとぼしすることもなかつた。ただし、小松先生は「問うても詮ないことこそ問うに値する問題だ」（『自伝』第二部第十二章）という考えの持ち主だった。とすれば、答えが出ないことは本望だったかもしれない。

優れた芸術作品や建築物が後世に残るのは偶然の結果にすぎない、価値あるものが残るとは限らないなど、文明の存在根拠が確たるものでないことに苦しむのは若いころからの傾向で、小松先生自身はそれを「内面的クライシス」と表現されていた。これを支えに——と『自伝』第二部第三章で自ら語られた——、また時に物体に意志を認めるアニミスティックな感受性——それを示唆した発言が『自伝』第二部第十四章にある——を支えに、一つの壮大な宇宙観を提示した作品が『果しなき流れの果に』である。それは「結晶星団」を経て「ゴルディアスの結び目」に、そして『虚無回廊』の中締めに結実した。ここに小松先生の生涯のテーマの展開と、文学を方法論とした闘いの軌跡を見ることが出来る。

### 文明的クライシス、科学的事実主義

小松先生のもう一つの主戦場は『復活の日』『日本沈没』などのクライシス小説であつた。その意味性は三・一一後への示唆を含めて今後の小松左京研究に委ねられた課題であるが、作品の基盤の一つが膨大な歴史知識に裏打ちされ

た強靱な「相対化力」だったことは間違いない。それが小松先生をしてクライシスを常に「文明的クライシス」として扱わせ、逆にまた自然現象への着目を促した。

小松 文明的クライシスが自然的クライシスによって大きく変わるとか、そういうことが日本は起こりやすいという感じがしてたんだ。関東大震災でも十万人以上死んだんだよね。

——自然的クライシスを設定することで、何が明らかになるんですか。

小松 文明の意味が問い直されるってことだね。つまり文明は自然に勝てるかと（『自伝』第二部第八章）。

このスタンスは地震や地震災害さえ地震科学を含む人類の知性の問題として扱ったルポルタージュ『小松左京の大震災<sup>95</sup>』にも明らかである。基本的な捉え方は宇宙論SFの場合と同じだが、該博な知識と明確な社会像に立脚して「系」を不安定化させる思考実験が、深い文明論的考察を可能にしたのだった。

よく知られているように、『日本沈没』は続編が構想されていた。インタビューでは、それがコスモポリタニズムとナシヨナリズムの相克を「日本沈没」後の異常気象に起因する科学技術文明の危機を背景に描き、もって「日本」の人類史上の意義を問うものとなるはずだったことが開示された。国土を失ったからこそ地球社会に貢献し、十八世

紀以来の人類社会の停滞性の緩和に寄与できるというのである。そしてこのテーマ設定は、戦争で亡くなった人々に対する小松先生の「贖罪」でもあった。一方で小松先生の内発的動機は、やはりクライシスの描写そのものにあった可能性が高い。だからと言つていいと思うが、『日本沈没』も宇宙論SFとの統合をねらったと思われる『さよならジュピター』も続編は発表されなかった。しかし、基本ストーリーや盛り込まれるはずだったメッセージは明確で、それらは『小松左京自伝』の奇しくも「第二部」でかなりの程度まで語られた。本来の『日本沈没・第二部』と『さよならジュピター・第二部』は少なからず共通のモチーフで貫かれている。前者のそれが後者の「第一部」で部分的に具現化されていることも明らかである。

SFは科学やそれが可能にした認識の意味をどう捉えるか、科学を応用した技術が社会変動の契機になる状況をどう理解するかを模索した文学である。そしてその中でも、ことのほか科学や技術と人間、科学や技術と社会の間に生じる矛盾、葛藤あるいはそれらによって可能となる飛躍を引き受け、物語として表現できたのが小松先生だった。完成された主要長編としては『日本アパッチ族』『復活の日』『果しなき流れの果に』および『継ぐのは誰か?』をあげることができるが、一九七〇年代後半〜八〇年代前半の中編小説群も重要である。『日本アパッチ族』『復活の日』は小松先生としての実存主義文学であり、さらに「科学的実存主義」（『自伝』第二部第五章）を提起したのが『継ぐの

は誰か?』である。インタビューの際に科学と実存の関係やパラダイム論について先生と議論できたことは、私にとって最高の思い出である。

『継ぐのは誰か?』は人類が善意の結果として招いた新人類絶滅の中で、人類との混血が生まれることに最後の希望をつなぐ。文明的クライシスの作品を含め、小松先生はいわば人類の「希望」が成立しうる根拠を文学者として見極めようとされたが、もとより人格の深層において科学者であり、同時に哲学者ないし神学者でもあった。残された課題は我々が我々自身の問いを問う中で引き継がなければならない。

#### 4. 「伝言」の伝え手として

私が小松左京先生に最後にお会いしたのは、二〇一〇年十一月十三日のことであった。小松左京研究会が企画し、箕面温泉に投宿した旅行会に顔を見せてくださったのである。所用のため旅行会には参加せず、しかしたまたま関西にいた私は、乙部順子マネージャーへのインタビュー記事が掲載されたその日の『朝日新聞』夕刊（大阪本社版）を携えてホテルに駆けつけた。その記事を乙部さんが読み上げ、小松先生が「よしっ」と力強く答えられるのを聞いたのが、私と先生の最後のやりとりになった。まだ何度かお目にかかる機会はあると思っていたが、もう取り返しはつかない。一読者として私淑した時期を含め、四十年近いお付き合いはこうして終わった。

私自身は『日本アパッチ族』を含む小松クライシス小説の大ファンであり、それが根底に置く社会観を内面化している自覚がある。一方で最も好きな作品は『継ぐのは誰か?』とその系列の科学論SFであり、私はそれを通して科学者とはどのような存在であるかを学んだ。これらはその後の職業生活に直結している。『果しなき流れの果に』はよくわからない人間で、小松先生にそう述べて、やや機嫌の悪かった先生から「それは君が俗人だからだよ」と言われたこともあるが、だからこそ見えた部分もあったかもしれない。

『小松左京自伝』第二部は前述の経緯で成立しており、やはり小松先生の「作品」ではなく「伝言」と受けとめていただいた方がいいと思う。私はその伝え手としてベストを尽くしたが、また小松先生がチェックもされているが、先生が自ら筆を執っておられたら異なる表現になっていたこととは言うまでもない。しかし先生は聞き書きを否定しない方であり、その意味で『自伝』第二部も間違いなく小松先生の著作である。

本稿をまとめるきっかけになったのは、NHK『クロワゼアップ現代』で小松左京追悼番組を担当されていた町田誠ダイレクターの取材を受けたことである。記して謝意を表したい。

